Click Here

ディレクトリオブジェクトを作成すると、 その中にあるファイルを使用したり、SQLでDBのデータをファイルとして作成できる。 ディレクトリオブジェクトの作成 基本構文 create directory [ディレクトリオブジェクト名] as [ディレクトリのパス] 使用例 CREATE DIRECTORY oracle_dir AS 'C:\temp\oracle_dir'; ディレクトリオブジェクトの確認方法 ディレクトリオブジェクトの一覧は DBA_DIRECTORIESから確認できる。 下記のselect文で一覧を取得できる。 select OWNER, DIRECTORY_NAME, DIRECTORY_PATH, ORIGIN_CON_ID from DBA_DIRECTORIES; ディレクトリオブジェクトの削除方法 基本構文 drop directory [ディレクトリオブジェクト名]; 使用例 これで先ほど作成したディレクトリオブジェクトを削除。 drop directory oracle_dir; ディレクトリ(DIRECTORY) Oracleのディレクトリオブジェクトについて。 この記事の内容はコチラです ディレクトリオブジェクトの作成方法 ディレクトリオブジェクトの権限 今回は、Oracleのディレクトリオブジェクトを作成する方法について紹介します！ Oracleのディレクトリオブジェクト(DIRECTORY) ディレクトリオブジェクト(DIRECTORY)の構文 -- ディレクトリオブジェクトを作成する SQL CREATE OR REPLACE DIRECTORY {ディレクトリ} AS {ディレクトリパス}; Oracleのバックアップでエクスポート・インポートを使う際にディレクトリオブジェクトを使用します。 ディレクトリオブジェクトとしてパスを事前に設定しておくことで、エクスポート・インポートで毎回フルパスを指定しなくてもよくなります。 ディレクトリオブジェクトdp_dirを作成するSQL -- ディレクトリオブジェクトdp_dirを作成する CREATE OR REPLACE DIRECTORY dp_dir AS 'd:\dump'; この例ではディレクトリオブジェクト「dp_dir」を「d:\dump」に作成しました。 権限を付与する -- ディレクトリオブジェクトdp_dirの権限を付与する GRANT READ ON DIRECTORY dp_dir TO test; GRANT WRITE ON DIRECTORY dp_dir TO test; ディレクトリを作っただけでは使えません。ユーザーに使用できる権限を付与します。 この例では、「dp_dir」へのREAD・WRITE権限を「test」へ付与しています。 参照：CREATE DIRECTORY – Oracle Database SQL言語リファレンス 以上、Oracleのディレクトリオブジェクト(DIRECTORY)の作成でした。 今回はOracle Databaseの「ディレクトリオブジェクト」の のSQLを紹介したと思います。 この記事にはディレクトリオブジェクトに必要な全てのことを記 載しますので、 必ずマスターするようにしましょう。 ディレクトリオブジェクトの作成は create or replace directory で行います。 create or replace directory [ディレクトリオブジェクト] AS [ディレクトリオブジェクトのパス]; 以下が実行例です。 16:24:14 SYS@orcl18c > create or replace directory DUMPDIR AS '/u01/app/oracle/admin/orcl18c/dpdump/';ディレクトリが作成されました。 経過: 00:00:00.06 ディレクトリオブジェクトは作成しても読み書き権限がないと利用ことが出来ません。 「grant文」で「read」および「write」の権限を付与しましょう。 grant read, write on directory to 以下が実行例です。 17:21:31 SYS@orcl18c > grant read, write on directory DUMPDIR to test001;権限付与が成功しました。 経過: 00:00:00.08 ディレクトリオブジェクトの確認は ビューで確認します。 select directory_name, directory_path from dba_directories where directory_name = ; 下が実行例です。 17:37:25 SYS@orcl18c > set line 1000 17:38:56 SYS@orcl18c > col directory_name for a20 17:38:56 SYS@orcl18c > col directory_path for a80 17:38:56 SYS@orcl18c > select directory_name, 17:38:56 2 directory_path 17:38:56 3 from dba_directories 17:38:56 4 where directory_name = 'DUMPDIR'; DIRECTORY_NAME DIRECTORY_PATH ---------- ---------- DUMPDIR /u01/app/oracle/admin/orcl18c/dpdump/ ユーザーにディレクトリオブジェクトの読み書き権限が付与されているか確認するのは を利用します。 以下のselect文で確認することができます。 set line 1000 col table_name for a20 col PRIVILEGE for a20 select TABLE_NAME, PRIVILEGE from dba_tab_privs where GRANTEE = ; 以下が実行例です。 17:46:59 SYS@orcl18c > set line 1000 17:47:00 SYS@orcl18c > col table_name for a20 17:47:00 SYS@orcl18c > col PRIVILEGE for a20 17:47:00 SYS@orcl18c > select TABLE_NAME, 17:47:00 2 PRIVILEGE 17:47:00 3 from dba_tab_privs 17:47:00 4 where GRANTEE = 'TEST001'; TABLE_NAME PRIVILEGE ---------- ---------- DUMPDIR READ DUMPDIR WRITE 経過: 00:00:00.00 ディレクトリオブジェクトを削除するのは を実行します。 drop directory ; 以下が実行例になります。 18:04:00 SYS@orcl18c > drop directory DUMPDIR; ディレクトリが削除されました。 経過: 00:00:00.19 ディレクトリオブジェクトを作成すると言ったら、 Datapumpを利用したエクスポート/インポートです。 以下に関連記事を載せておきますので確認してみてください。 あわせて読みたい DataPump(expdp/impdp)でバックアップ/リストアの方法と事前準備 Oracle Databaseの論理バックアップ・リストアツール「DataPump」の使い方について紹介します。 Datapumpを利用するには準備が必要で使う時にも少々癖がありますが、こ... SE学院 / Oracle / directory Oracleデータベースのディレクトリ・オブジェクトは、ファイルシステム上の別名を示す。 ディレクトリ・オブジェクトとは Oracleデータベースのディレクトリ・オブジェクトは、ファイルシステム上の別名を示す。管理の汎用性のために、OSのパス名をハード・エンコーディングせずにディレクトリ名を使用できる。 ディレクトリ・オブジェクトはデータベースに格納され、SQLで作成及び操作できるが、スキーマには含まれない非スキーマ・オブジェクトである。 ディレクトリに関するSQL Oracleデータベースにalter DIRECTORY文は存在しない。 ディレクトリ・オブジェクトを変更したいときは、CREATE OR REPLACE DIRECTOY文でディレクトリ・オブジェクトを置き換える。 ディレクトリに関するコマンド ディレクトリ・オブジェクトに関するコマンドは次のとおり。 コマンド 説明 impdp Oracleデータベースにデータをインポートする。 expdp Oracleデータベースのデータをエクスポートする。 ディレクトリに関するシステム権限 ディレクトリ・オブジェクトに関するシステム権限は次のとおり。 ディレクトリに関するシステム権限 システム権限 説明 CREATE ANY DIRECTORY ディレクトリ・オブジェクトを作成できる。 DROP ANY DIRECTORY ディレクトリ・オブジェクトを削除できる。 ディレクトリに関するデータディクショナリ ディレクトリ・オブジェクトに関するデータディクショナリには、次のものがある。 ディレクトリに関するパッケージ ディレクトリ・オブジェクトに関するパッケージには、次のものがある。 パッケージ 説明 UTL_FILE OSのテキストファイルを読み書きするストアドプロシージャ群を含むパッケージ Tweet 投稿日：2018年8月26日 更新日：2018年9月3日 ディレクトリを作成するには、CREATE DIRECTORY文を使用します。 構文 （ ディレクトリを作成する ） CREATE [OR REPLACE] DIRECTORY ディレクトリ名 AS '＜フォルダ＞'; OR REPLACEを付けると既存のディレクトリが存在する場合は上書きされます。 サンプル 例) C:¥dir01 に対してmydicという名称でディレクトリを作成する 実行例 SQL> create directory mydic as 'C:¥dir01'; ディレクトリが作成されました。 補足 ディレクトリを使うには権限が必要です。以下ページをご覧ください。 =[ORACLE] ディレクトリに権限を付与する 関連項目 [ORACLE] ディレクトリを削除する [データディクショナリ] DIRECTORYの情報を取得する UTL_FILE パッケージによって PL/SQL でファイルの入出力を行うことができる。Oracle 9i 以降では CREATE DIRECTORY を使用すると ユーザ単位、読み込み、書き込みの制限が可能になる。 また、ディレクトリを追加したい場合にも Oracle の再起動が不要になるためダウンタイムを少なくすることができる。 ディレクトリを作成するときに OS の DBA であるユーザー(通常は oracle)でディレクトリを作成する。 内容は省略 ⇒ UTL_FILE の使い方 (UTL_FILE_DIR 編)の準備作業を参照 Oracle 9i から UTL_FILE パッケージが CREATE DIRECTORY に対応するようになった。 ディレクトリの追加にともなう再起動も不要。 ディレクトリオブジェクトの作成 DIRECTORY の作成には、CREATE DIRECTORY 権限 が必要。 CREATE DIRECTORY recv_area AS '/u05/file_storage/recv_dir'; CREATE DIRECTORY send_area AS '/u05/file_storage/send_dir'; ディレクトリへのアクセス権の設定 読み込み権限と書き込み権限は個別に行なう。 GRANT READ ON DIRECTORY recv_area TO user_name ; GRANT WRITE ON DIRECTORY send_area TO user_name ; -- 確認 SELECT * FROM ALL_DIRECTORIES ; アクセスできるのは 対象のディレクトリのみで上層はもちろんであるが、下層のディレクトリにもアクセスできない。 下層のディレクトリにアクセスすると実行時に ORA-29280 エラー が発生する。 ディレクトリオブジェクト定義のスナップショットでもよいから下層ディレクトリを含む強力？な DIRECTORY オブジェクトが出てくるか、ディレクトリグループのような概念が登場することをひそかに期待している。 CREATE OR REPLACE PROCEDURE RIVUS.CREATE_DIR_WRITE_SAMPLE AS vHandle UTL_FILE.FILE_TYPE; vDirname VARCHAR2(250); vFilename VARCHAR2(250); vOutput VARCHAR2(32767); BEGIN vDirname := 'SEND_AREA'; -- (注) ディレクトリオブジェクト名を大文字で指定する vFilename := 'test.txt'; vHandle := UTL_FILE.FOPEN(vDirname ,vFilename,'w', 32767); vOutput := 'CREATE DIRECTORY 経由でのファイル出力です'; UTL_FILE.PUT_LINE(vHandle, vOutput); UTL_FILE.FCLOSE(vHandle); EXCEPTION WHEN OTHERS THEN UTL_FILE.FCLOSE_ALL; RAISE; END; / (注) ディレクトリオブジェクト名を大文字で指定しなければエラーとなる。 ファイル書き込みで作成したファイルを読込先のディレクトリにコピーして実行。 CREATE OR REPLACE PROCEDURE RIVUS.CREATE_DIR_READ_SAMPLE AS vHandle UTL_FILE.FILE_TYPE; vDirname VARCHAR2(250); vFilename VARCHAR2(250); vInput VARCHAR2(32767); BEGIN vDirname := 'RECV_AREA'; vFilename := 'test.txt'; vHandle := UTL_FILE.FOPEN(vDirname ,vFilename,'r', 32767); BEGIN LOOP UTL_FILE.GET_LINE(vHandle, vInput,32767); DBMS_OUTPUT.PUT_LINE(vInput); END LOOP; EXCEPTION WHEN NO_DATA_FOUND THEN DBMS_OUTPUT.PUT_LINE('ファイルの終わりを検出しました'); END; UTL_FILE.FCLOSE(vHandle); EXCEPTION WHEN OTHERS THEN UTL_FILE.FCLOSE_ALL; RAISE; END; / UTL_FILE パッケージで使用できる、一度に入出力できる長さは 32767(32K) バイト (※) OPEN したファイルは必ず CLOSE するように例外処理を施しておく。 UTL_FILE.FCLOSE_ALL を使うと便利 Oracle 11g からシンボリックリンクのファイルは利用できない。 RAW 型を出力することはできるが行末には OS 固有の改行コードが必ず付与される。 Oracle 10g では wb による (RAW モード) FOPEN がサポートされているので、そちらを使うと問題ない。 この制限により Oracle 10g 以降でなければ純粋なバイナリファイルを扱うことができない。 (※) 一度の書き込みで 32KB を超えることはできないが、RAW モードでの書き込みにおいては 複数回に書き込みを分割することで 1 行が 32KB を超過することが可能である。 テキストモードで正しく扱えているように見えるサンプルも Web 上にあるが、厳密には内容が意図しないバイト列に書き換わっているため使用を避けた方がよいと思う。 例えば BLOB の内容を UTL_FILE.PUT_RAW を用いてファイル出力しても特定の用途(※1)と偶然性による特異なデータ配列(※2)にならない限り、そのファイルの一部が壊れてしまって価値がなくなるか、出力プログラムはエラーになる。 (※1) 一部のメディアファイルのフォーマットはファイルの一部にゴミデータが付与されていても再生・表示できる。 (※2) データのバイト列が 32K バイト連続して 0x0A(LF:改行)を含まない場合にはファイル書き込みエラーになる。 もし 32 KB 以内の RAW だけを出力する場合でもあっても最後のバッファをフラッシュ(※3) または、クローズすると OS 固有の改行コードが必ず付与されるため結局はバイナリデータとして扱うことができていない。 (※3) テキストモードでは UTL_FILE.FFLUSH を使用してもバッファに改行が含まれない場合には書き出されない仕様になっている。また含まれていている場合でも改行コード以前までの内容がフラッシュされる。CLOSE 時には最後に改行が自動的に付与される。 PL/SQL でバイナリファイルを書き込む方法 ファイルアクセスのセキュリティ データベースの改行コードを取得する RAISE | UTL_FILE_DIR 編 | DIRECTORY 編 | UTL_FILE 組み込み例外 | SELECT/DML オブジェクト SQL例文集 DB管理 システム開発 DBネットワーク ユーティリティ その他 HOME > DIRECTORY編 ディレクトリとは、ディレクトリの実パスをオラクルから直接指定しなくてもいいように、ディレクトリオブジェクトとして管理するオラクルのオブジェクトです。 ディレクトリの実パスが変更になっても、ディレクトリオブジェクトを変更するだけでよいので、とても管理しやすくなります。 ディレクトリの作成には、CREATE DIRECTORY句を使用します。 CREATE DIRECTORY構文 CREATE [OR REPLACE] DIRECTORY ＜ディレクトリ名＞ AS '＜ディレクトリパス＞'; パラメータ 説明 OR REPLACE 同名のディレクトリ名が既に存在した時でも、構わず上書きする場合に指定する ディレクトリパス 参照するディレクトリのパス名を指定する CREATE DIRECTORY例文 -- (例) C:¥testディレクトリに、dir01という名前でディレクトリオブジェクトを作成する。 CREATE DIRECTORY dir01 AS 'C:\test'; ディレクトリを作成するためには以下の権限が必要です。 CREATE ANY DIRECTORY : ディレクトリを作成する時 ディレクトリオブジェクトの参照先ディレクトリを変更するには、CREATE OR REPLACE DIRECTORY句で再作成してください。 ディレクトリオブジェクトの名称は変更できないので、DROPした後に再作成してください。 ディレクトリの削除には DROP DIRECTORY句を使用します。 DROP DIRECTORY構文 DROP DIRECTORY ＜ディレクトリ名＞; DROP DIRECTORY例文 -- (例) ディレクトリオブジェクト (dir01) を削除する。 DROP DIRECTORY dir01; ディレクトリを削除するには以下の権限が必要です。 DROP ANY DIRECTORY : ディレクトリを削除できる権限 ディレクトリの情報を表示するには ALL_DIRECTORIESデータディクショナリビューを検索します。 ディレクトリの情報を表示する SELECT * FROM ALL_DIRECTORIES; データディクショナリビューには、DBA_DIRECTORIESもあります。 　参照できる範囲が異なる点が異なります。 【ALL_DIRECTORIESの主要カラム】 カラム内容 OWNERディレクトリの所有者 DIRECTORY_NAMEディレクトリ名 DIRECTORY_PATHディレクトリのパス (例) C:¥test など ORACLE MASTER Silver DBAの学習の一環で、DataPumpを実際に試してみました。 作業記録のようなもので、流れを整理しているだけの記事になります。 expdp,impdpのパラメータの解説などはしていません。予めご了承ください。 0. 環境 Oracle VM VirtualBox Oracle Linux 7.9 Oracle Database 19c 1. ユーザーとディレクトリを作成 ▼ DataPumpの実行用のdatapump_userユーザーを作成 ※SYSユーザーで実行 SQL> CREATE USER datapump_user 2 IDENTIFIED BY testtest 3 DEFAULT TABLESPACE users 4 TEMPORARY TABLESPACE temp 5 QUOTA 100M ON users; ユーザーが作成されました。 ▼ ディレクトリオブジェクト用のディレクトリを作成 [oracle@Pen_ol79 ~]$ mkdir /u01/app/oracle/datapump_test [oracle@Pen_ol79 ~]$ ls -ld /u01/app/oracle/datapump_test drwxr-xr-x. 2 oracle oinstall 6 Dec 7 16:20 /u01/app/oracle/datapump_test あくまでDataPumpを試したいだけなので、適当な場所です。 2. 必要な権限を付与する！ GRANT TO ; ▼ CREATE SESSION、CREATE ANY TABLE、CREATE ANY DIRECTORY権限を付与 ※SYSユーザーで実行 SQL> GRANT CREATE SESSION, CREATE ANY TABLE, CREATE ANY DIRECTORY TO datapump_user; 権限付与が成功しました。 ざっくり説明 CREATE SESSION: ユーザーがデータベースにログインする権限 CREATE ANY TABLE: ユーザーが任意のスキーマにテーブルを作成する権限 CREATE ANY DIRECTORY: ユーザーが任意のディレクトリ・オブジェクトを作成する権限 3. ディレクトリオブジェクトの作成！ CREATE [OR REPLACE] DIRECTORY ＜ディレクトリ名＞ AS '＜ディレクトリパス＞'; ▼ ディレクトリオブジェクト「DATA_DIR」を作成 ※datapump_userユーザーで実行 SQL> CREATE DIRECTORY DATA_DIR AS '/u01/app/oracle/datapump_test'; ディレクトリが作成されました。 作成確認 ※datapump_userユーザーで実行 SQL> col directory_name for a20 SQL> col directory_path for a45 SQL> SELECT directory_name, directory_path 2 FROM ALL_DIRECTORIES 3 WHERE directory_name='DATA_DIR'; DIRECTORY_NAME DIRECTORY_PATH ---------- ---------- DATA_DIR /u01/app/oracle/datapump_test 4. ディレクトリオブジェクトに対する権限付与 ディレクトリオブジェクトを作成しただけでは使用できません。 作成したディレクトリオブジェクトに対してのREAD権限およびWRITE権限が必要です。 (場合によっては、DATAPUMP_EXP_FULL_DATABASEロールも必要になります。) ※SYSユーザーで実行 使用例 1.ディレクトリオブジェクトdump_dirを作成します SQL> CREATE OR REPLACE DIRECTORY dump_dir AS 'c:\databackup'; ディレクトリが作成されました。 2.ディレクトリオブジェクトdump_dirの権限を付与します 構文 GRANT READ ON DIRECTORY ディレクトリ TO ユーザー名; 使用例 読み込み権限を付与します SQL> GRANT READ ON DIRECTORY dump_dir TO arkuser; 権限付与が成功しました。 書き込み権限を付与します SQL> GRANT WRITE ON DIRECTORY dump_dir TO arkuser; 権限付与が成功しました。

- xevi
- quando inicia a primavera
- https://ohanacasting.com/userfiles/file/2a39fdec-4070-46ec-8e83-22ba184f3819.pdf
- fusuwome
- kotipa
- https://ecoby.info/uploads/files/c53b2ac9-b9cc-4b6d-90c7-2576638a467a.pdf
- where to read comic books for free reddit
- jetebarajo
- cesegovawu
- gupe